熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2022.10.14
第 168 号
発行 入試・広報課

旅がもたらす 介護予防効果

寄稿

健康・スポーツ教育研究センター 益満 美寿准教授

くまもと県民交流館パレアでは、県内大学等から講師を招いての県民向け特別講座「キャンパスパレア」が開かれています。８月１日（月）には、健康・スポーツ教育研究センターの益満美寿准教授が「旅と健康～スポーツツーリズムのすすめ～」と題して講演しました。益満准教授に講演内容を基に旅の効用について寄稿してもらいました。

自己効力感が向上／スポーツと観光融合も

今回の講演では、人はなぜ旅にでるのか、旅行はどのような効果をもたらすか、といったことを中心に話を進め、これまで実践してきた産学連携の旅プロジェクト「作業療法と旅行会社のコラボレーション」において実証された介護予防効果を紹介しました。

子ども、高齢者、障がい者が「旅」という非日常的な環境に身を置くことには不安や心配がつきまといます。しかし、その分、無事に旅を終えて帰ってきたときの満足感や達成感は大きく、自己効力感（自信・やる気）が向上するなど、心の変化（健康増進の好循環）が起きてきます。講演では、本学ホームページ（OTスペシャルムービー）で紹介した、障がいを持つ女の子がイルカと泳ぐための家族旅行をマネジメントした作業療法（旅のリハビリ）「イルカと泳いだ女の子」の実践事例を取り上げながら、旅が与えてくれる自己再生のプロセスによって引き起こされた「情動の変化」が精神的健康感の向上につながるということを説明しました。

このほか、これからの新しい旅行の楽しみ方として、スポーツと観光を融合させた「スポーツツーリズム」を紹介しました。近年、「新たなコトを体験する」旅行として注目されているもので、スポーツを「する人」・「見る人」・「支える人」という３つのタイプの参加の仕方があります。スポーツイベントを軸に多様な参加ができる体験型旅行ということができるでしょう。

コロナ禍の中にあって、旅に対する関心は高いようで、参加者からは、「旅行に対する視点が変わった」「毎日、旅にでます」「コロナで引きこもっていたけど少し動いてみます」など多くの肯定的な意見を得て、意を強くしました。

介護予防効果を実証するために企画した人吉・球磨への日帰り旅行

臨地実習控え 学び深める

医学検査学科３年 集中講義

生理検査学実習の時間にエコー検査に挑む学生たち

臨地実習を直前に控えた医学検査学科３年次生への10月集中講義が、９月28日（水）から行われています。

学生たちは、オリエンテーションを経て、マナー教育、各種講義・実習、感染対策、個人情報セキュリティー、ハラスメント防止講習会などを受講し、10月27日（木）に臨地実習認定式を受けます。さらに、同31日（月）から来年１月13日（金）まで約２か月半に及ぶ臨地実習を通して、臨床検査技師の現場を経験する予定です。（安部悠介）

「重要なのは疑問持ち続けること」

アカデミックスキルⅡ　竹屋学長が基調講義

医学検査学科の初年次生を対象とした「アカデミックスキルⅡ」（第２回授業）の基調講義が11日(火)、1301講義室Lで行われ、竹屋元裕学長が「研究のすすめ方 －自身の経験もふまえて－」と題して、研究者としての心構えなどを語りました。

約120人の学生を前に、竹屋学長はアルベルト・アインシュタインの残した「重要なのは、疑問を持ち続けること。知的好奇心は、それ自体に存在意義があるものだ」という言葉を紹介し、「日常の中で常に問いを見出し続けることを意識して生活を送ってほしい」と話しました。また、自身が取り組んできた「動脈硬化におけるマクロファージの役割」という研究内容や、米サンディエゴ留学時代のエピソードなどを交えながら、研究者として歩んできた軌跡を紹介しました。講義の最後には再びアインシュタインの「失敗したことのない人間というのは、挑戦をしたことのない人間である」という言葉を紹介し、「どんなに些細なことであれ、恐れることなく挑み続けることをどうか諦めないでほしい」と、熱く語りかけました。

次回アカデミックスキルⅡ基調講義は、27日（木）４限目（看護学科）に50周年記念館で、川口辰哉研究科長が講義します。

（アカデミックスキル支援センター・松尾健志郎）

医学検査学科の１年次生を前に熱く語る竹屋学長

私の秘話ヒストリー

看護学科
松本 佳代講師

薪ストーブライフ

我が家に薪ストーブがやってきたのは約２年前。夫は長年憧れていたらしく、薪ストーブの展示会やイベント、薪ストーブのある喫茶店など、情報を仕入れては家族を連れていき、その魅力を熱く語っていました。ああ家に置きたいんだな、とはわかりましたが、寒いのが苦手な私は、スイッチひとつで温かくなるエアコンやヒーターに比べ、マッチで火をつけ、空気の量を調節して火を育てる手間や、薪の調達などを考えると、うーん、と二の足を踏んでいました。

熱意に負けて我が家にお迎えしたはいいものの、１歳児と６歳児が走り回り、彼らの世話でてんてこ舞いの私を尻目に、ゆったりと薪をくべ、揺れる炎を見つめる夫。「ああ、エアコンなら１秒ですむのに。やらなきゃいけないことは山ほどあるんだぞ」と思いつつ、楽しそうでうらやましくも思います。

ストーブでピザを焼くと美味しいそうなのですが、ものぐさな私はなかなか実行できず…今年の冬は、チャレンジできたらと思います。

14日＝前夜祭　杏祭スケジュール　15日＝本祭

14日（金）＜前夜祭＞
15時　開会式／15時30分　吹奏楽部／
16時　ダンスmimic／17時30分　軽音楽部
15日（土）＜本祭＞
10時　開会式／10時30分　サークル対抗／12時30分　お笑いライブ（しゃかりき、パンクブーブー）／13時10分　模擬店・文化展紹介／14時20分　仲良しコンテスト／15時40分　Sing～杏祭2022stage／16時40分　フォトコンテスト表彰式／17時　抽選大会（閉会式含む）／19時　花火（グラウンド）
※来場者を本学学生・教職員のみに限定しての開催になります。学外実習中及び実習2週間前の行動制限がある学生は参加禁止となります。

私のお薦め記事

（このコーナーはDive! LSP１年生が担当しました）

総合型選抜で入学した1年次生が、日々の新聞や雑誌などから気になる記事をピックアップし、毎週紹介します。これは、Dive! LSP と銘打った教育プログラムの一環です。

「子ども食堂」開始10年
全国6000カ所に拡大―地域交流の拠点にも

（2022年9月24日　時事メディア）
https://medical.jiji.com/news/54321

概要

2012年８月に東京都大田区で始まった「子ども食堂」が開設されてから今年で10年。同様の取り組みは、今では全国に6000カ所を超えている。しかし、18歳未満の子どもの７人に１人が貧困な家庭で生活をしており、貧困問題の解消は進んでいない。最初に子ども食堂を始めた近藤博子さんは「行政が就労や教育にもっとお金を掛けてほしい」と訴える。**（看護学科・隈部　蒼）**

コメント

コロナ禍でつながりの場が少なくなった今、このような子ども食堂は地域のつながりや子ども同士のつながりの場としてとても重要だと思う。費用をはじめさまざまな問題があるものの、子どもを中心に据えた地域交流という意味でも、このような場を守っていくことが大切だ。高校の友人が「ふるさと元気子ども食堂」の代表をしている。実際に活動を目の当たりにし、熊本にとっても社会にとっても大きな役割を担っていくと感じた。
（リハビリテーション学科PT専攻・奥村　空良）

インフォメーション

週間行事予定（10月15日～10月21日）	
10 / 15（土）	杏祭（本祭）
10 / 17（月）、18（火）	総合型選抜業務説明会
10 / 19（水）	動物慰霊祭
10 / 20（木）	大学訪問（必由館高校）